
ハンバーガー

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハンバーガー

【Nコード】

N1941E

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ホージーとハリスはアメリカのオマハ市で連続失踪事件の捜査にあたっていた。そこでホージーは今話題のハンバーガーショップの前を通り過ぎてあることに気付いた。そのあることとは。

第一章

ハンバーガー

アメリカ合衆国オマハ市。今ここで話題のハンバーガーショップがあつた。

「とにかく最高なんだよ」

「美味くて仕方がないんだ」

「病み付きになるわ」

雑誌やネットで皆が口々にこう証言する。その店は評判になつていた。

味がいいのだ。しかも最高に。パンもレタスやピクルスも美味いが特に肉が最高だつた。それでオマハだけでなくアメリカ全体で評判になつていたのだ。

ニューヨークやロサンゼルスからはるやって来て食べる者もいた。ある金持ちなどはわざわざ飛行機で取り寄せて毎日一個は食べる程だ。そこまで美味かつたのだ。

「やっぱりこの肉だよな」

「そうよね」

幸運なことにオマハに住む一家がその店の中でハンバーガーを食べながらにこやかに話をしていた。

「味が半端じゃないよ」

「私このお肉が大好き」

娘が隣にいる父親に対して言う。店の中は白く奇麗でマクドナルドに似ている。だがマクドナルドのチェーン店よりも遥かに大きく席も多い。だがその席が満室で列までできている程だ。

「牛肉よね、これって」

「そうだろ」

父親は何気なくこう娘に言葉を返した。

「ハンバーガーだからな。やっぱり」

「そうよね。ただ」

「ただ。何だ？」

「何か味が違うみたい」

ハンバーガーをほおぼりながら首を傾げるのだった。その小さな可愛らしい首を。

「味が違う？」

「牛かしら、これ」

目も怪訝なものにさせていた。

「この味。何か違うような」

「違う筈ないだろ」

だが父親は娘のその言葉を否定するのだった。

「ハンバーガーに牛肉が入っていないと何なんだよ」

「それはそうだけれど」

「少なくとも豚や鶏じゃない」

これは流石にわかる。豚も鶏も牛とは全く違う味だからだ。ましてや羊とも全く違う。だからわかるのだった。

「じゃあ牛に決まっているだろう」

「そうなの」

「そうさ。だから安心して食べるんだ」

娘を安心させて言う。

「この美味しいハンバーガーをな」

「わかったわ」

父親のその言葉にくくりと頷いてそれから大人しく食べた。だがこの時オマハ、いやオマハのあるネブラスカ州やその近辺の幾つかの州で奇怪なことが起こっていたのだ。それでFBIも動いていたのだ。

その担当はデレック・ホージー捜査官だった。中肉中背の黒人の男だ。彼ともう一人ユダヤ系の若い女性であるマクダラ・ハリスがこの捜査に当たっていた。

彼等もまたオマハに来ていた。そこにあるFBIの事務所でソフ

アーに向かい合って座って難しい顔をしていた。

「今も手懸かりはなしですね」

「全くだな」

ホージーは難しい顔で腕を組んでハリスのその言葉に頷いた。

「どうしたものか」

「失踪者はかなりのものになっています」

「元々この国は失踪者が多いがな」

「はい」

ハリスもまたその知的な顔を難しくさせてホージーの言葉に答えた。実際にアメリカでは年間百万人単位での失踪者が出ている。その内訳は不明だが奇怪な事件が関係しているのではないのかといった失踪も数多く存在しているのも事実だ。アメリカの一面と言ってもいい。

「それでも最近のここは」

「有り得ないですね」

「そうだ、有り得ない」

ホージーは難しい顔のまままでハリスの言葉に答えた。

「何人だったかな、それで」

「二百人を越えました」

「遂にか」

「そしてです」

ハリスの言葉は続く。

「昨日河で発見された人骨ですが」

「！？そういえばそんな話もあったな」

ホージーはそれを聞いてふとした感じで目を動かした。

「川辺に転がっていたんだっただな」

「そうです。その骨ですが」

「ああ」

「肉が綺麗に削ぎ落とされていました」

「削ぎ落とす!?!」

「はい」

ホージーの驚いた言葉にクールに答える。しかしクールなのは声だけでその表情は曇ったものだった。その顔での言葉であった。

「一片残らず。それこそ」

「一片も残さず削ぎ落とすといえばだ」

ホージーは考えながら述べた。

「ネコ科の動物がそうだな」

「猫!？」

「ああ、猫は骨を舐めるだろう」

「ええ」

これはハリスも知っていた。

「うちの猫も鳥や魚をそうして食べますので」

「それだ」

彼はそこに突っ込みを入れる。右手の指を動かして。

「舌がザラザラしているな。それで削り取るんだ」

「それですか」

「知らなかったのか」

「猫を飼いはじめたばかりなので」

これは言い訳だった。しかしそれでも言っのだった。

「今はじめて知りました」

「そしてこれは猫だけじゃない」

「他のネコ科の動物もですか」

「ああ。ライオンやトラ」

そのうえである生き物の名前も出た。

「それにピューマだ」

「ピューマですか」

アメリカにいる大型のネコ科の生き物である。身のこなしが素早くとりわけ足音を立てずに歩くことが得意で獲物を静かに狙うのである。

「まだ野生のはいるかな」

「少なくともこの街にはいないかと」
ハリスはホージーの今の言葉には首を傾げて答える。

第二章

「それに大型の肉食獣の事件にはあまりにも広範囲です」

「それもそうだな」

「それにです」

ハリスはまた言ってきた。

「その肉は刃物で削り取られていました」

「刃物でか」

「そうです。かなり奇麗に」

こう述べるのだった。

「なくなっていました」

「他殺か」

ホージーはそれを聞いてこう考えだした。

「だとすると」

「その可能性は高いかと。ただ失踪した人間は実に多岐に渡ります」

「そうだな」

またハリスの言葉に頷いた。

「職業も年齢もバラバラだ」

「はい」

「性別もな。ただ皆そんなに太ってはいないな」

ここが重要だった。

「この国で太っていない人間を探すのは結構骨が折れるのだがな」

「その通りです」

アメリカでは長い間国民の肥満が問題になっている。これは肉や

菓子の摂り過ぎが原因だと言われて久しいが改善する兆しはない。

彼等自身が困っていることに。

「その中で比較的健康で筋肉質の人間が失踪している」

「不思議な話だ」

「手懸かりが本当にありません」

ハリスはあらためてこう言う。相変わらず困った顔で。

「カルト教団や快樂殺人者ではないかといった話もありますが」

「それが二百人も殺すか？」

「それも考えられないかと」

すぐにホージーに答えた。

「幾ら何でも。しかも死体は」

「今のところ見つかっていない」

「あくまで殺人事件なら、ですが」

一応はこう前置きする。心の中に思っていることは伏せて。

「ですが本当に何もありません」

「失踪してから本当に何も無いからな」

「このままではこの捜査は」

「まあそれはまだ言わないことにしよう」

ホージーはそこから先は言わせなかった。

「まだ捜査もはじまっただばかりだ」

「ええ」

「丁度いい時間だ」

自分の言葉に頷いたハリスに対して告げる。

「食事しないか」

「何にしますか」

「ハンバーガーはどうだ？」

こう彼女に提案してきた。

「最近この街で評判の店があるんだ。そこに行かないか」

「ハンバーガーですか」

しかし彼女はここで微妙な顔をするのだった。

「それは今は」

「何だ？今日は駄目な日か」

「申し訳ありません」

彼女もホージーの今の言葉に応えてこう述べるのであった。

「戒律的な理由ということですよ」

「そうか。なら仕方ないな」

ユダヤ教においては肉等を食べない日も存在する。それであった。ユダヤ系の多いアメリカではこのことはよく知られていることである。

「じゃあ他の何かを食べに行こう」

「和食はどうでしょうか」

「和食!？」

和食と聞いてホージーの目が少し動いた。

「和食か」

「豆腐や野菜を食べるのもいいものですが」

「それもそうだな」

腕を組んで少し考えてからの言葉であった。

「健康的だしな」

「そうです。健康にはやはり和食です」

ハリスも言う。

「それで如何でしょうか」

「そうだな。本当は中華料理にするつもりだったが」

「あれは豚肉を多く使いますので」

今は駄目だと。そう述べるのだった。

「できれば今は遠慮させて頂きます」

「わかった。じゃあ和食にしよう」

彼は決めた。

「それでいいな」

「ええ。それではそれで」

あらためてホージーの言葉に頷く。

「御願います」

「うん。ではな」

二人は同時に立ち上がってそのまま事務室を出て駐車場に向かう。そこから車に乗りそれで街のジャパニーズレストランに向かうのだった。和風の外観と内装の店に入りやはり和風のテーブルに向かい

合って座ってからハリスがホージーに言ってきた。

「そういえば長官は」

「何だ？」

「アジア系の料理をよく食べられますね」

「ああ、確かに」

ホージーの方もそれは否定しなかった。目を少ししばたかせながら答えるがこれはたまたま目が乾いていたからに過ぎない。

「大学でアジアの歴史について学んだからな」

「アジアですか」

「ああ。中国が専門だった」

こう述べる。

「とはいってもあれだ。料理の歴史だ」

「成程」

「よく言われるだろ」

ここで顔を顰めさせるホージーだった。

第三章

「我が国が食生活が貧しいってな」

「そうは思わないのですがね」

「あまりにもそう言う話が多いんで頭にきていたんだ。それでだ」
「それを学ばれたのですか」

「だったら他の国はどうかと思ってな。いや、調べてみれば」
表情が明るくなる。そのうえでまた述べるのだった。

「面白いものだ。色々とわかった」

「色々ですか」

「中国人は何でも食べる」

それをハリスに話す。顔が陽気に笑っているのは調べていた時のことを思い出しているからであろうか。

「それこそ何でもな」

「何でもですか」

「ああ。ただしだ」

陽気な笑みが急に消えた。その顔で語る。

「あまりよくないものもあるな」

「よくないものというと」

「いや、それは話さないでおくか」

だがホージーはここでその話は止めた。

「やはりな」

「何かあるので」

「何かあるから話さないんだよ」

また笑顔になるが今度は作り笑いだった。あえて話を誤魔化しているのがわかる。

「悪いがな」

「事件に関わるものでなければ構いません」

「そうか」

「はい。聞いていてあまり気持ちのいい話ではないでしょうし」

ハリスはそれを察知していた。それもあつてこれ以上話を聞こうとはしなかったのだ。これは自分にもホージーに対しても向けたものであつた。

「そうだな。それでだ」

「ええ」

話を変える二人であつた。

「何を頼むんだ？」

「豆腐を」

ハリスはこう答えた。

「それを食べます」

「そうか、豆腐をか」

「主任は何を召し上がられますか」

「俺は天麩羅だな」

笑つてこう答える。

「海老と烏賊のな。それと味噌汁と御飯とでだ」

「随分とヘルシーな献立ですね」

「これがまた随分と美味いんだよ」

白い歯を見せての笑顔だつた。その笑顔で語るのだった。

「天麩羅がな。白い御飯によく合つてな」

「そうなのですか」

「確かユダヤ教では」

「どちらも駄目です」

鱗のない海のものとは駄目なのだ。ユダヤの戒律では。

「ですから」

「また随分と寂しい食事だな」

「戒律はそういうものではありませんから」

だが彼女はそれを受け入れていた。言葉もはつきりとしたものだった。

「それでいいのです」

「そうか。なら俺はこれ以上は言わないさ」

これでその話を止めるのだった。

「それでは。食べるとするか」

「はい」

丁度いいタイミングで頼んでいた料理が来たので箸を手に取る。

そうしてそれぞれの料理を食べる。食べ終わると車で事務所に戻るのだった。その時に行く前に話をしていたハンバーガーショップの前を通るのだった。青空の下に周りを緑のカーテンで覆ってそこに白い建物を見せていた。その白い建物である。

「あそこですね」

「ああ、あそこだ」

ホージーはハリスに答えた。ハリスが運転しておりホージーはその助手席にいる。二人並んで全部の座席にいたのであった。

「あそこがその店だ」

「そうですね。あそこが」

「今度行ってみるか？」

「そうですね。今度ね」

ハリスは正面を見たまま答える。ホージーは丁度右手に見えるその店を眺めている。

「行ってみます」

「かなり美味いらしい」

ホージーは言った。

「一度食べたら病み付きになる程にな」

「それはかなり美味しいですね」

「特に肉がいいらしいな」

「肉がですか」

「ああ。新鮮で」

ハンバーガーなのに、である。

「味も歯触りもいいらしい。相当いい肉を使っているらしいな」

「成程」

「しかもかなり安いそうだ」

値段もであった。これで人気が出ない筈がない。

「だからだ。今も列になっている」

見れば店の前は列になっている。それも百ヤードはある。ホージ
ーはそんな客達を見て楽しそうな笑顔になるのだった。

第四章

「ああして並ぶのはいらいらするが楽しいんだよな」

「楽しいですか」

「ああ。今か今かと待つのがな」

「こうハリスに述べる。」

「それがいいんだよ」

「そうなのですか」

「待つのは嫌いか」

「はい」

一言で答えてみせてきた。そこには完全な否定だけがあった。

「私にはそんな趣味はありません。時間が最も貴重なものだと考えていますので」

「仕事もそうか」

「そうです。素早く行い素早く終わる」

まるで何処かのエージェントの様な言葉だ。FBIらしいと言え
ばらしいが。

「それがいいと考えております」

「君の考えはわかったよ」

ホージーは助手席でその両手を頭の後ろで組んでから答えた。リ
ラックスした姿勢だ。

「そういう考えもあるな」

「そういうことです」

「まあ俺は待つ楽しみを味わうのが好きだからな。それにしても」

「今度は何でしょうか」

「本当によく並んでいるな」

またハンバーガーショップの列を見て言う。今は信号待ちなので
じっくりと見ることができた。

「繁盛しているものだな」

「それ程美味しいということですね」

「そうだな。本当に俺も一度……んっ!？」

ここでホーギーは客達を見て声をあげるのだった。

「どうされました？」

「いや、並んでいる客達だけだな」

彼はその客達を見続けてハリスに答える。

「おかしいな」

「おかしいのですか」

「ああ、これは」

目を剣呑なものにさせてハリスに述べる。窓を開けて身を乗り出してその並んでいる客達を見ていた。彼等から目を離さない。

「ひょっとして」

「何かおありなのですね」

「あるから見ているんだよ」

これまでよりも真剣な言葉だった。

「これは。まさか」

「まさか？」

「一旦事務所に帰ろう」

彼は言った。

「一旦な。それからだ」

「わかりました。しかし」

ここでハリスは言う。

「どうした？」

「また随分と長い信号待ちになっていますね
前を見て言うのだった。」

「一体どうしたのでしょうか」

「そのうち青になるだろう？」

「もう五分になりますか」

「五分もか。壊れたか？」

「そうかも知れません」

やはり前を見たままホージーに述べる。

「幾ら何でもこれは」

「やれやれ、じゃあ警察を呼ぶか」

「私達がそうですが」

「いや、そうじゃなくてだ」

FBIは連邦警察である。全米単位での捜査を担当するのだ。色々小説や特撮にも出て来ているが実際はアメリカ合衆国の組織の一つに過ぎないのだ。もっともその初代長官であるフーバーは盗聴が得意であり歴代の大統領の弱みを握って半世紀もその座にいた人物だったが。

「州の警察をだよ」

「そちらですか」

「そう、そちらだ」

話はそこだった。

「我々の管轄ではないだろう？信号は」

「確かにその通りです」

「だからだよ。じゃあすぐに連絡を入れる」

「州警察にですね」

「そうだ。それにしても信号の故障とは」

首を捻つての言葉だった。

「世の中何が起るかわからないな」

「それが世の中です」

ハリスの事務的な言葉が車の中に響く。州警察を呼んだ後でようやく事務所に戻ることができそれから本格的な話になるのだった。

まずは。ホージーが口を開いた。

「あのハンバーガーシヨップだが」

「はい」

「密かに調査を開始するぞ」

「ハンバーガーシヨップをですか」

「そうだ。これは俺の予想だがな」

真剣な顔でハリスに述べる。

「一連の失踪事件だが」

「それですね」

他ならぬ彼等の担当事件だ。だからそれが話に出てハリスの顔も
雰囲気も緊張したものになる。

「殺人事件かも知れないな」

「最初からそれは予想していましたね」

「ただしだ。ただの殺人事件じゃない」

ホージーはこう言い加える。

「下手をすればな」

「では一体それは」

「それがわかるのはこれからの捜査次第だ」

こうは言っても自分の考えが外れているとは心の中では思ってい
なかった。

「これからのな。しかし」

「しかし」

「これから何が起こっても驚かないな」

「！？何をでしょうか」

ハリスは今のホージーの言葉の意味は理解できなかった。表には
出していないかったが言葉だけは疑問符になっていた。

「何が起こってもとは」

「まあそれはな。調べているうちにな」

「それですか」

「そうだ。さて」

また話をする。

第五章

「まずはあの店の食材の入手ルートについて調べるか」
「わかりました」

こうして話からはじまった。食材の入手ルートが調べられたがその結果面白いことがわかった。ハリスはそのことを事務所でホージーに話していた。

「面白いことがわかりましたね」
「そうだな」

ホージーはハリスのその言葉に頷いていた。二人で調べた結果だ。「パンや野菜、チーズといったものは確かに素晴らしい食材を集めています」

「問題は肉だな」
「そうです」

二人が言うのは肉についてであつた。

「肉は。そのルートが不明です」

「そうだ。何故だ」
それを言う二人だった。

「肉が一番重要だというのにな」

「何があるのでしょうか」
「それだ。問題はそこだ」

指差す姿勢になるがそれは宙を指差していた。

「何故。肉だけがわからない」
「そこですね。主任」

ハリスはここで真剣な顔でホージーに問うた。これまでになく真剣な面持ちである。

「それですが」
「うん。何だ？」

ハリスの言葉に顔を向ける。

「その肉のルートこそが問題なのですね」

「そうだ。どうやって手に入れているかだ」

それをあらためて言うのだった。

「肉がなければハンバーガーはできない」

「はい」

これは言うまでもないことだった。

「だからな。調べてみよう」

「はい。それでは」

「何が出て来るかな」

ホージーは話が決まったところでふと呟いたのだった。

「下手をすれば」

「下手をすれば」

ハリスはホージーの言葉に顔を向ける。彼の顔色が変わったのを見たのだ。

「とんでもないことになるぞ」

「そうですね」

何はともあれ店の肉の入手ルートが調べられることになった。それは肉の分析と共に調べられた。これはハリスのアイディアだった。二人はまず店でそのハンバーガーを頼みそれを食べる。事務所に帰りその医務室で一旦吐いてそれから分析するのだ。分析結果はルートと共に恐ろしいものだった。

「あの、主任」

ホージーは事務室にいた。そこで分析をした医官の顔を真っ青にさせた報告を聞いていた。彼の前には同じく顔を蒼白にさせたハリスもいた。

「恐ろしいことがわかりました」

「こちらです」

二人は同時にこうホージーに告げてきた。

「肉の種類ですが」

「そのルートは」

「どうだったか？」

ホージーは二人に対して同時に話を聞くことにした。だから今の問いは二人に同時に向けたものであった。目も二人を同時に見ていた。

「わかったのだな」

「はい、まずは入手ルートですが」

ハリスが答えた。

「業者やそうしたものを使ってはいませんでした」

「やはりな」

ホージーはそれを聞いて当然だといった顔になった。どうやら読んでいたようである。

「そうなっていたか」

「そのかわりにいつも深夜に大きなトラックが店に来まして」

「うむ」

「そこから肉を運んでいました。それで」

ここでハリスは懷から何かを出してきた。見ればそれは一枚の写真であった。

「これを御覧下さい」

「証拠写真だな」

「そうです。その入手した肉のものです」

こうホージーに語る。

「私はこれを密かに撮った際思わず声をあげそうになりました」

「ほう、君がか」

「信じられませんでした」

蒼白な顔のままで述べる。普段の彼女からは想像もできない有様だった。

「まさか。こんな」

「だが。この写真が何よりも雄弁に物語っている」

それでもホージーは言うのだった。しかしその彼にしるその表情は強張っている。その顔で向かい側のソファ―に座る二人と写真を

見ているのだ。

「これが証拠だ」

「人の腕がですか」

見ればその写真に映っているのは人の腕だった。冷凍された腕、それに詳しくは見えないが他の部分も見えている。偶然ダンボールから出てしまっていたのだ。

「そうだ。これを見て否定はできないな」

「ええ。それに」

ハリスはさらに言う。

「今度は何処に行くのかとか。どういった『素材』がいいかとか」

「『素材』か」

「子供がいいと話していました」

戦慄さえ彼女の顔に浮かんできていた。

「これは録音もしています」

「そうか。では確実な証拠になるな」

「はい」

強張った顔のままホージーに答える。

「信じられません」

「信じられなくとも事実だ」

ホージーはこう述べてから今度は医官に顔を向けた。その強張った顔で彼にも問うのだった。

「それでだ」

「ええ」

「分析結果はどうだったか」

「その肉ですが」

彼は単刀直入にそれを言ってきた。やはり蒼白の顔で。

「人のものでした」

「そうか、やはりな」

ホージーは彼の言葉を聞いて頷いた。予想していたような顔で。

第六章

「最初はまさかと思いましたか」

「だが分析結果は事実だな。間違いないな」

「信じたくはなかったですが」

答えはハリスのものと同じだった。

「その通りです」

「やはりな。あの店は人肉をハンバーガーの素材にしていたのだ」

これで証拠は揃った。証拠は、である。

「さて。後は逮捕するだけだな」

「ですが主任」

ハリスは蒼ざめた顔でまたホージーに尋ねた。

「何だ？」

「どうしてわかったのですか」

彼女が不思議に思うのはそれであった。

「どうしてかか」

「はい。普通はわかるものではありません」

彼女は言う。

「肉のルートは企業秘密である場合が多いですしそれに食べてしまえば証拠にはなりにくいです」

「その通りだ」

食べれば後は排泄されるだけだ。だから証拠にはなりにくいのだ。過去にこれで犯罪が隠されていたこともある。所謂食人殺人鬼である。

「ですが何故それがわかったのですか。それはどうして」

「目だ」

彼は一言で答えてきた。

「目ですか」

「そうだ」

ハリスに対して頷いてみせてきた。

「目でわかったのだ」

「どういうことですか？」

「俺が学生時代中国について勉強してきたのは言っただな」

「はい」

それはもう聞いていた。だから頷くことができた。

「それは既に」

「それだ」

彼はそこだと言ってみせた。

「それなのだ。問題は」

「といたしますと」

「中国の言い伝えにあるんだよ」

今度は言い伝えの話になった。

「中国では人を食った場合は」

「食べた場合は」

「目が赤くなるんだよ」

「目がですか」

「そうさ」

にこりと笑って二人に告げた。

「あの時な」

「店の前を通った時ですね」

ハリスはその時のことだとすぐに察しをつけた。

「ああ、あの時並んでいた客が目の赤いのが多かったからな。それでわかったんだよ」

「そうだったのですか」

「言い換えればそれを見ないとわからなかったな」

自分でもその実感はあった。だからあえて言うのだった。

「とてもな」

「左様ですか」

「ああ。それでだ」

彼はまた言葉を述べる。

「本格的な捜査に行くぞ。早速な」

「わかりました。ところで主任」

ハリスは立ち上がろうとするホージーに対してここで声をかけた。ホージーもそれに応えて浮かせようとした腰をまた下ろして彼女の話聞くことにした。

「何だ？」

「目が赤いということですが」

「ああ」

彼女が問うのはそこであつた。

「どうしてそうなるのでしょうか」

「何でも中国では悪霊の目は赤いそうだ」

「悪霊の目は、ですか」

「そうだ。それで人を食うのは言うまでもなく罪だな」

「はい」

これはどの国でもどの場所でも同じことだ。人が人を食うというのがこれ以上はない程の大罪であるというのは何処でも同じなのだ。もつともそれでもこうした話は各地に残っているのだが。

「罪を犯した人間は悪霊と変わらないということだな」

「それを知らなくともですか」

「少なくとも法律的には罪はないさ」

客に関しては、という意味だった。肉を食ったその客達は。

「信仰でもな。彼等は騙された側だ」

「ええ」

アメリカでは思いの他信仰心について五月蠅い。それでホージーも信仰についても言及したのである。

「けれど。食べたということには変わりがないからな」

「そういう罪ですか」

「そういうことだな。罪は罪だ」

彼は言う。

「例えそれが知らないで何も道義的には責任がなくてもな」

そこまで言うとは今度こそ本当に席を立ち捜査に向かうのだった。それから暫くオマハはこのおぞましい事件で世界を騒がせるがそれはまた別の話だ。だが赤い目によって一連の失踪事件が解決したのは紛れもない事実だった。その罪により。

ハンバーガー

完

2008・3・8

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1941e/>

ハンバーガー

2010年10月8日15時14分発行